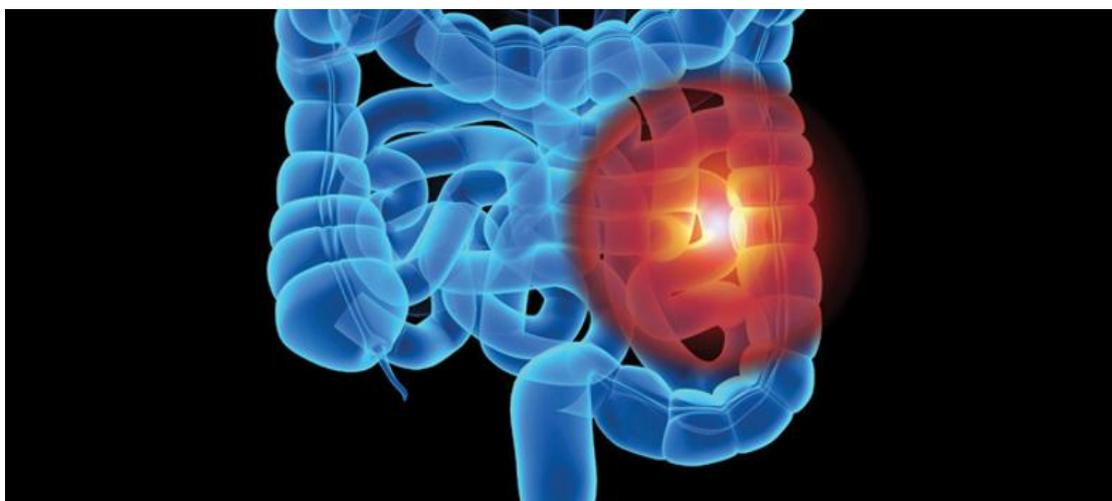
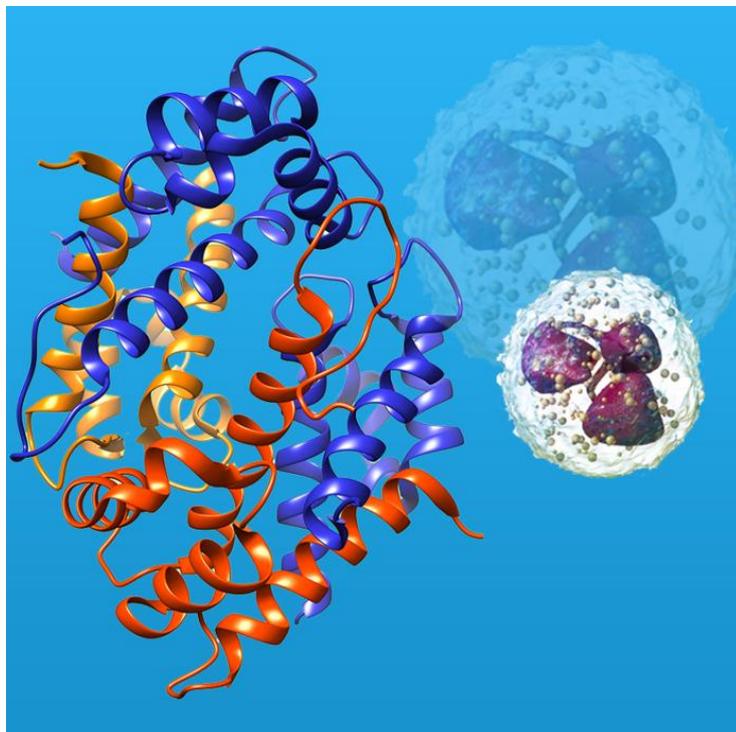


潰瘍性大腸炎診断薬： 便中カルプロテクチンとは

下痢や腹痛を生じ、寛解と再燃を繰り返しやすい潰瘍性大腸炎。従来、再燃の判別には大腸内視鏡検査が用いられていましたが、患者の糞便を用いる簡便な体外診断薬が登場しました。



カルプロテクチンは、腸管粘膜で炎症が生じると好中球が放出しますが、腸管内で分解されず、安定性の高い物質であるため、カルプロテクチン濃度は炎症の程度と関連します。欧米ではすでに炎症性腸疾患の検査に利用されています。



潰瘍性大腸炎では、多くの場合は寛解と再燃を繰り返しますが、症状が出ない場合があります。それが病状の悪化や癌のリスクを高めることが分かっています。カルプロテクチン検査は腸内の炎症のみを反映するため、正確に、簡便に、直接的に腸の炎症を評価できるようになりました。



カルプロテクチン検査では、専用の検便

容器を用いて便を採取し、それを医療機関に提出します。現在、カルプロテクチン検査は、原則3カ月に1回を限度として保険適用が認められています。



●注意！！！！

カルプロテクチン検査は、炎症の再燃を確認するための内視鏡検査は減らせても、潰瘍性大腸炎患者で発症リスクが高まる癌の早期発見を目的とする内視鏡検査までは減らせません。



補 足

英国の国立医療技術評価機構（NICE）が公開しているガイドラインでは、過敏性腸症候群と潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患を鑑別する際にカルプロテクチン検査の実施を推奨しています。カルプロテクチン検査を使用するとほとんどの過敏性腸症候群患者が内視鏡検査なしに診断できるとしています。

